
空 空

日頃寝 ハル

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空 空

【Nコード】

N3830R

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

見ているものは同じはずなのに、すれ違ってしまった優衣子と孝介。

彼？

爽やかな緑色の風が俺の髪の上を通り過ぎた。俺は時間を気にしながら、その公園を目指した。先月買ったお気に入りの腕時計の長針が、情け容赦なく正しい位置より180度も進んでいる。

優衣子はブランコに座り、アホみたいに口を開けて空を見ていた。「UFOでもいた？」

俺は遅れたことを気にしつつ、駆け足の俺に気がつかない優衣子に聞いた。

「星を見てんのー」

優衣子はニコリともせずと言った。俺は空を見上げた。雲ひとつ無い青空には、もちろん星なんか何処にもない。太陽が眩しかった。

「星なんかねーよ」

太陽を直視して目の中に黒く残像が残った。それを振り払うように乱暴に瞼を擦る。

「コウスケ、知らないの？ 昼間にも星ってあるんだよ」

優衣子は俺が時間に遅れたことに怒っているのか、あきれたように言った。

「お前、星が見えんのかよ」

「見えるよ。アタシには見える」

自信たつぷりに優衣子はそう言っただけ頬を膨らませて、ブランコからそっと立った。誰も乗っていないブランコは風に吹かれてひとりでに揺らいた。

彼女？

孝介はいつも待ち合わせに遅れる。しかも10分とか20分とか、怒って帰っていいのか、怒って殴っていいのか微妙な時間だけ遅れ

る。だから私はいつも、いつも待ち合わせの公園でブランコに一人座り、孝介が来たらどう怒ろうか考えて、待っている。

でもその日は違った。20分過ぎても来なかった。ブランコに揺られながら、ヒールの踵が地面を擦らないように気をつけながら、私はだんだんと不安になった。

私はいつだって不安だ。孝介は私のことをほっとき過ぎている。告白したのだって私からだし、私のことは誕生日だって血液型だって、自分から聞いてくれない。私が孝介に聞いて、それでおざなりに聞き返しているだけ。孝介は私にあまり関心がないんだ。

携帯で時間を確かめると約束の1時より22分過ぎている。さつき時間を見たときから2分しか経っていないことに驚く。

メールを打とうか考えて、「今どこ?」って書いて、消して、書いて、消した。今までの私と孝介のメールを見てみると、やっぱり私から送っていることの方が圧倒的に多くて、孝介の返信はそれなくて、そこが男の子なのかなって思ってたけど、私はまた不安になる。

ふと空を見ると、一つだけ、青い空にぽつんと白い雲が浮いていた。上空は風が強く吹いている模様。見る間にどんどん雲は形を変え、視界の隅へ飛んでいった。残るのは青い空と白い太陽だけ。

太陽。目の中に黒い太陽が残ってしまった。目がジンジンとしばらくして、私はそれを取り除こうと目をぎゅっと瞑った。瞼の裏に浮かぶ小さくて黒い太陽は、チラチラと瞬いて、それは夜に見える三等星の星のように弱弱しくなっていた。

その感覚が可笑しくて、私はもう一度力強く輝く太陽を、おそろおそろ見てみる。

「UFOでも見てんの?」

待ちわびた彼の声は、少し笑いを含んだ声で、それがいつも通り過ぎて、私は怒ろうか思っていたことをするつと忘れてしまった。

「星見てんのー」

私はもう、星を見ることを諦めた。孝介が遅れるのはいつものこと

だった。

彼？

優衣子は変な女だ。

「アタシに告白してよ」

優衣子のその一言で俺たちは付き合い始めた。

たまたまその日いつも一緒に帰ってる奴が顧問に呼び出され、優衣子と二人で部活から帰っている途中のことだ。俺はバスケット部のベテラン選手で優衣子はマネージャーだった。優衣子は気の会う奴だったし、話してて楽しかった。俺は驚いたけど、嬉しかったんだと思う。

ただ、優衣子は俺に告白されたと言い回っているらしい。正しくは俺が「告白を強要された」だ。

いつも待ち合わせに使っている公園を発見したのも優衣子だ。部活の試合で他校に行った帰り、住宅地のど真ん中にある、ブランコと滑り台しかない小さい公園を優衣子はとても気に入った。

お互いの家から一駅分以上の距離があるのに、そこで待ち合わせようと譲らなかった。その公園から映画館が入っているデパートに、直通のバス停があったから俺は渋々承諾した。

また優衣子はよく「私は三人目の女ですよー」といじけた。

「まさか、私が初めての女じゃないよね？」

とからかう様に言うので、俺は正直に「三人目」と答えたのだ。それが多いのか少ないのかは分からない。だけど優衣子はそれから「私は三人目」と言うようになった。例えば

「三人目の女から言わせて貰いますけどねー。コウスケには男気が足りないですよ」

などなど。

そのくせ自分のことは「知らないほうがいいよー」とにやりと笑いながら、答えない。

彼女？

孝介のことを知れば知るたび、私は不安になっていった。

例えば血液型。孝介の血液型は私の血液型と相性が悪かった。今まで血液型占いなんて信じてなかったし、好きじゃなかったけど、孝介がケータイで血液型占いを見ていて私に血液型を訊いたとき、私はつい「内緒」と言ってしまった。だって相性が悪いと知れたら、なんて思つかとか、そもそもなんで孝介は私の血液型を知らなかったんだとか、色々考えちゃったから。

私は孝介の事を知っている。だけど、本当は全然知らない。孝介がどうして血液型占いなんかを見ていたのだろうとか。

もしかしたら前のカノジョ達の間では、血液型占いに重要な意味があったんじゃないのか。どんな人達で、どんなことを孝介と話していたのだろう。そう思うととても不安になって仕方なかった。

孝介が私の事を聞いてくれない分、私の不安はどんどん膨らんでいった。

最初に孝介を見たのは部活の見学に行ったとき。

マネージャー募集しているところが野球部とバスケット部しかなくて、じゃあバスケットに行ってみようと友達と二人で見学に行った。

もともとそんなにマネージャーになりたいわけではなかった。ただ響きが良いかったのと、自分で運動する気は三年間で失せていたからだった。

バスケット部では仮入部期間だったけど、一年生と二年生で試合をしていた。楽しそうにコートの中を駆け回り、声を掛け合い、体育館履きのキュッキュと鳴く音、ボールが跳ねる低い音、

そして、ある一年生が遠くから投げたボールが、孤を描いて「バシユ」っと鳴って、シュートを決めたとき、私はマネになる事を決めた。

私はバスケットは初心者で、簡単なルールしか知らなかったけど、それでももちろん二年生の圧勝だったけど、そのシュートはとてもカッコ良くて、ちよっと忘れられなかった。

孝介はあのときから私の憧れで、だから素っ気無くされても私は文句を言えなかった。だけど振り向いてくれないのは寂しくて、ついつい私は我が儘を言ってしまう。

彼？

部活を引退してしばらく経って、優衣子に振られた時、俺は驚いたけど、悲しくはなかったんだと思う。優衣子はいつも自分で決めるから、だから「別れよっか」と言われたとき、俺はすんなりと承諾してしまった。

優衣子と別れて、変わったことと言えば、一緒に下校しなくなったことと、遊びに行かなくなったこと。それだけだ。

友達は面白そうに俺のことをからかったけど、俺は面白くもなんともなかった。優衣子とも付き合う前のように普通に接することが出来て、それほど気まずくはなかった。

受験勉強を始めなくちゃいけないくて、さて勉強しようと思ったとき、優衣子からメールが来なくて、それを不思議に感じた。いつもなら見計らったように「図書館デートしよ」と誘いのメールが来るのに。

そう言えば、俺から遊びに誘ったことは一度もなかった。優衣子からメールが来て、それに返信したりしなかったり。

優衣子は今、何をしているのだろう。

まだ蝉が鳴いている。それが煩くてとても耳障りだった。部屋の

窓から吹いてくる風は、まだまだ夏の匂いそのもので、エアコンの冷たい風と相殺して快適な空間を生み出してるはずなのに、気分は晴れない。

俺が悪かったのだろうか。

ムシャクシャして勉強どころではなくて、俺は「図書館に行つてくる」と親に言い残して、家を飛び出した。自転車で蒸し暑い空間を切り裂いて走る。図書館に着いたらきつと冷房が涼しいのだろう。けど今は、ギラギラと照りつける太陽の真ん中を走っていたかった。

入道雲がモクモクと競りあがり、それに競うように蝉が命がけで鳴いていた。俺も負けないように力いっぱいペダルを漕いだ。

図書館にもしかしたら、優衣子がいるかもしれない。そう期待してしまう自分が格好悪くて、空を仰いだ。

彼女？

後輩から小ぶりで可愛い花束を買ったとき、すぐ側に孝介がいるのが分かった。

私から孝介を振ったとき（ケンカしてその勢いで半分は冗談だったのに）孝介は、怒るでもなく悲しい顔をするでもなく、「分かった。別れよう」と真顔で言いやがった。

だから私は、別れた後でも孝介と笑顔で接することが出来た。

「コウスケ、卒業だね」

孝介の貰った花束から一本チューリップを引き抜き、私のと交換してみた。孝介は困ったように、笑っていた。

孝介は私の事をそれほど好きではなかったんだ。そう思うと今でも胸が痛む。私はすごく好きだったから。だけど、だから私は孝介と付き合い続けるのに耐え切れなかった。

「なんか書いてよ」

そういつて色紙を渡すと、孝介は「後で見ろよ」と前置きして、ささっと何か書いてくれた。その間に私も孝介の色紙に一言書く。

「絶対、後で見ろよ」

と孝介が何度も言うから、私はとても今見たくなっただけで、見ようとする孝介に全力で止められた。

そのうちに後輩たちの銅上げ隊が孝介をさらった。嫌がる言葉とは裏腹に笑顔の孝介。その顔を見ているうちに涙が出てきて、私は慌てて袖で拭う。

ワッショイの掛け声が途切れないうちに、そつと色紙を覗いてみた。孝介の小さい字は、言葉と言葉の間の隙間に遠慮がちに見つかった。

私が書いた言葉と同じことが書いてあった。なんだか笑ってしまった、それが泣き笑いになって、ふと空を見上げると、いつか見た空と同じ、真つ青な空にぽつんと雲が浮かんでいた。

その雲の行方を見ていたかったけど、それは叶わなかった。孝介を（投げ）下ろした銅上げ隊が私を巻き込んで、私はふあつと空に浮かんだ。ぐんと近くなる空。ふわりと浮かぶ白い雲が私に微笑んでいるような気がした。

孝介はきつと今頃、色紙をこっそりと見ているんだろう。そう思っ
って思いつきり笑えた。

目を閉じると、小さい星が一つ。それはずっと残っている。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

久しぶりに恋愛ものを書いてみました。

なんか、かゆいです。自分が。

感想、ご意見、ご指摘、宜しかったらお願いします。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3830r/>

空 空

2011年3月29日08時28分発行